

モニター意見

「特集記事 長崎大水害から 20 年 —その教訓と現況」の一節から

向谷 光彦

科学技術の急速な進展に伴って、自然災害に関する報道の困難さが表面化しているのではないかと常々感じていました。特に、これらを教授する立場にあっては、その数式の成因さえ分からなくても、設計が出来てしまうという自己矛盾にも陥りがちです。今回、テレビ長崎の樋田さんの「7.23 長崎大水害は教訓となりえたか？」を拝見して、実体験に基づく多くの事実や人の言葉に触れることが出来ました。災害や防災に関係する分野は幅広く、それぞれにかなり深い専門性を持っています。したがって、対社会性という観点で対策工事や分析などの実状をとらえ、十分な説明責任を果たすために、報道機関の方々と継続的な取り組みが期待されているのではないのでしょうか。自然災害学会のもつ広範囲の学術的知見を有効に活用するために、広く市民に防災教育を行う方策を示さなくてはならないように思います。

「無題」

匿名

2003 年 7 月の九州豪雨災害の記事について興味深く拝見しました。

ここは私の住んでいる地域でもあるからです。今回の記事は速報という形で、内容的に掘り下げたものではないものの、数字だけ見ても危険であったというのはよくわかりました。

ここは過去にも同様の災害が起っており、今回に至っては人災との意見も数多く出ており、行政の対応のまずさがこの災害の被害を増長させる結果になったのは否めません。

災害後、私は被害が特にひどかった場所に行く機会があったのですが、ある河川敷の住宅は斜めに倒れ崩壊しており、見るのも忍びない状態でした。これがもし、きちんと対策をなされてさえいれば、今回のレベルの災害でも被害がもっと少なかったと考えます。考えていた予想以上の事態が起こったとはいえ、前回の災害のデータが活かされていなかったことと、根本的な原因追求ができていなかったことが非常に残念です。

特集記事「長崎大水害から 20 年—その教訓と現況」を読んで

飛田 哲男

本特集記事は、研究者、実務者、報道関係者のそれぞれの視点から、長崎の大水害を捉えたものである。内容はコンパクトにまとめられており、最新の防災気象情報システム、防災都市づくりには計画の進行管理が非常に重要であること、災害時には「正常化の偏見」といわれる心理が働くこと、住民が土石流の予警報装置に慣れてしまっていることなど、率直に述べられている。

過去の災害パターンを熟知することは、次の災害に対する備えになるので、ぜひ市町村の防災担当の方々にも読んで頂きたい。それに関連して、読者数を増やすために、各号の最後に発行部数がどれだけあるのかを明記してはどうか。それによって読者数を知ることができるし、これから新しい読者を開拓する上で、購読する側の参考になるものと思われる。

「自然災害科学って」

長谷川 雅俊

自然災害とはどういうものを指すのか、自然災害の研究とはどういうものなのかを知りたくてモニターに応募した。

送られてきた自然災害科学 22 巻 2 号は鳥取県知事の巻頭言から始まっていた。自分の所属する学会の学会誌と違う雰囲気であった。巻頭言から特集、速報、論文と並んでおり、いわば現場から

始まり、より学問的にものをあとに持ってくる構成のためだろう。自分の所属する学会誌は逆の構成であった。自然災害科学は生きている現場の科学であることを強く感じた。討論を学会誌として明記して保証しているのも、この分野の学問を作り上げていく意識を感じた。

また、今年7月の災害が速報という形で報じられていることもこの学会の特徴を示しているように感じた。一方では、災害後の現場で被害調査を行うことは(必要な調査ではあるが)被災者の感情を考えると複雑な気持ちを抱いた。

速報「2003年7月九州豪雨災害について」 を読んで

川池 健司

今年も九州地方が豪雨災害に見舞われ、多くの人的被害まで発生した。とくに、4年前と同じような被害が発生した博多駅周辺の浸水被害では、「またか」との思いを抱かずにはいられなかった。今回の水害では130万都市の玄関駅の浸水が目目されているが、その上流の太宰府市や宇美川の上流域で多くの土砂災害が発生したことや、福岡市ではごく少量の雨しか観測されていないこと等は見落とされがちである。豪雨時の土砂災害への警戒、および流域規模で現象を捉えることの重要性がわかる。

また、9月中旬には韓国でも台風による水害で大規模な被害が発生したが、こういった韓国や中国、台湾のような周辺諸国・地域の災害を調査された方や現地からの報告があれば掲載していただきたいと思う。日本の災害研究が海外に貢献できること、あるいは国内においてもこれから目を向けていくべき課題が見つかるかもしれない。